

高齢者介護と離婚予防 - 家事を中心に -

愛知新城大谷大学・吉川知巳

【はじめに】

夫の親の介護が必要になる前に別れる「介護前離婚」増えている。池内によると「子育てと親の介護という2つの責任感で、離婚を踏みとどまっていた女性たちは、これからは“介護をするのもイヤ”という介護前倒し離婚が増加するのでは」と指摘している。このことは、これまで「介護は女性の役割」としてきた社会への反発と云ってよかろう。

こうしたことを踏まえて、介護前離婚・高齢者虐待の防止の一助には家事能力を養うことが肝要であることを提言する。

【1】 介護前離婚の増加

近年、離婚が増えている。離婚は昔からあった。が、最近の特徴は中高年夫婦の増加である。同居期間の離婚件数では、「20年以上」が1950年3.5%、1975年5.8%であったが、1998年には、16.9%に増えている。中高年まで夫婦として生活してきた男女が離婚するのである。いわゆる熟年離婚の増加だ。このことに呼応するかのように、介護前離婚が昨今は増えてきている現状だ。渋谷によると「実際に親の介護が必要になってからではなく、それが現実化する前に離婚したいという相談が、40歳から50歳代の妻側から増えてきている」と述べている。また、介護前離婚の原因は「夫が育児や家事に非協力的であり、夫婦間に対話がないことが多く、夫の普段の姿勢が問われている」と指摘している。

【2】 夫の普段の姿勢

1) 育児・家事参加

育児は、いまや父親が関わって当然とする意識が一般化してきている。育児をしない父親の社会から評価は高くはない。言葉を変えて言うと、父親が育児を担うことは通常のことになっている。他方、家事への父親の参加は育児と比較して乏しい状況だ。共働きであろうが父親は、できることなら家事はしたくないという意識が根底にある。

「家事は苦しくて、地味なものだ。そして、楽しさに欠ける。しかし、育児というものは子どもの笑顔があったりして返ってくる」と斧出は父親の意見を紹介している。端的に言えば、家事は地味であるが育児は楽しいと言えよう。

家事と育児の関係について、大日向は「育児と家事の多くは不可分である。それを切り離して“育児はするから家事は勘弁してくれ”という父親の態度を妻にしてみれば美味しいところのつまみ食いのみえて腹立たしい」と述べている。食事の準備・後片付けや洗濯等といった地味な父親の参加が少

ないのである。次は、介護前離婚の原因である後者の夫婦間の対話について論じる。

2) 夫婦間の対話

夫婦間の対話については、平山らの研究を概観してみよう。ポジティブな2態度である「共感」「依存・接近」は、妻が夫に対して有意に高い。逆に、ネガティブな2態度「無視・回避」「威圧」は夫が妻に有意に高かった。これらから、夫婦は対等ではなく、応答的な対話が成立していないといる。

以上、介護前離婚の原因を総括すると夫の家事・育児への消極的な参加や夫婦間の対話の悪さがやがては、介護前離婚を引き起こすといつてよかろう。

【3】 家事能力と男性

1) 高齢者虐待

家事・育児への夫の参加が良好で且つ、夫婦間の対話が応答的ならば、介護前離婚は予防できよう。夫婦で老親の介護にあたるのである。介護保険などの外部サービスも利用するのだ。

ちなみに、高齢者介護に付随する家事について、小野は「身内に家事を手伝ってくれる人がいると家庭内における高齢者虐待は少なくなる」と報告している。そこで、介護前離婚の一因である男性の家事参加を促進する意味をにも、結婚前に男女とも離家の経験を積み「自立」する提言したい。

2) 離家のすすめ

現在、親元から直接結婚生活に入るのだ。そこで、定家家族を結婚する前に離れて、単身生活するのだ。

そうすれば、家事能力が身につく、介護前離婚や高齢者虐待防止の一助になろう。泉は「独り暮らしをすることで、家事のスキルを磨いている独身男性の多さに吃驚した」と報告している。

【4】 まとめ

介護前離婚・高齢者虐待の防止の一助には、家事能力を養うことの必要性を中心に論じてきた。が、家事は生きている限り必要な営みであるから、男女を問わず身につけたスキルである。加えて、あと数年で団塊世代が65歳を迎えるからことの必要性は高まろう。

【文献】

- 1) 泉直樹：オトコの婚活 実業之日本社 2009
- 2) 大日向雅美：子育てSOS 法研 2001